
ヘルムート戦記

榊原美毅

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

ヘルムート戦記

【Nコード】

N5892C

【作者名】

榊原美毅

【あらすじ】

隣国『アランドラ同盟国』との戦いに明け暮れるヴァレンシア大陸の専制君主大國『ルシタニア帝国』。その国で若く有能な指揮官が頭角を現してきた。帝国子爵にして騎士隊長を務めるヘルムート・アンゲルス。彼の職務は大規模な戦いが幾度となく繰り返される国境地帯での部隊指揮。首都を離れたエトルランドの地で、戦乱の歴史を駆け抜けた青年の人生という歯車は、急速に回り始めたのだ……

プレリユード

国内の有能な用兵家が集められる『帝国軍参謀会議』という組織が置かれた場所は、英雄ゼフィオンの血を引く『ルシタニア帝国』第二九代皇帝ルーファウス三世の居城『ペルガモン』の城内、統帥本部の一室だった。

多くの衛兵が警備にあたる城内で、一人の騎士隊長が参謀会議室の鉄扉を開くよう命じた。

「ヘルムート・アンゲルス子爵だ。開けてもらおう」

そう名乗った男の容貌を数秒間見つめて一礼した衛兵は、鉄扉を押し開いて声高に言う。

「参謀会議議員・帝国軍イズアル騎士団騎士隊長ヘルムート・アンゲルス子爵、ご来場！」

参謀会議議長の壮年騎士ミハイル・サンチエスのみが、正当な理由で遅刻してきた銀髪の騎士隊長に反応を示した。

「やっと着いたか、アンゲルス卿。エトルランド草原の戦況はどうだ？」

「芳しくありません。第三軍ペリース司令官と第五軍ナルセス副司令官が奮戦していますが、敵軍の包囲網は強固。しかし、度重なるペリース卿の局所集中攻撃によって、秩序崩落が見て取れる部位もありました」

ヘルムートは、彫刻のように整った顔立ちに不安の色を浮かべた。「……第五軍のラウル司令官はどうした？」

問いたただす議長の鋭い視線が、彼の身体を射抜く。

「乱戦の末、愛用の戦斧だけを残して行方不明とのことです」「戦死したと考えるのが妥当だな」

冷静沈着を具現化したような男　ヘルムートと同じく二四歳の参謀会議議員ガブリエル・ラモン侯爵が残念そうな表情で呟く。彼は参謀会議議員で唯一、実戦に参加したことはない議員であるが、

戦略概論の専門家として、世界的に名を知られている男であった。「どうだかな」

議員の間で『長老』と呼ばれる六三歳の男ヴァレル・シュタインドルフ副議長は呟いた。彼が毒に染まった舌を吐き出そうとしたその時、再び鉄扉が開いて衛兵が駆け込んできた。

「会議中、失礼致します！ 戦況に大きな変化が見られたそうです！」

「して、変化とは？」

ラモン侯爵は、表情を変えずに訊ねた。

「北西方向からの敵増援です」

会議室は一瞬静まり、騒がしくなる。もったいぶらずに、悪化といえよかろう、と意味もないのに毒づいたのは、むろんシュタインドルフである。

参謀会議議長は、当然の言葉を発した。

「静粛に」

会議室が静まるのを待ち、彼は続ける。

「諸君、会議は中断だ。アンゲルス卿、貴殿は所属の騎士団に戻り、騎士達に出陣の準備をさせよ、今すぐに」

そして、全員が胸に拳をあて、静かな祈りを捧げた。

「大神ゼフィオンの祝福があらんことを」

大陸暦四二〇年。ヘルムート・アンゲルスという青年の名が、歴史の表舞台に鮮明な筆跡で残されたのはこの年からである。彼が戦場に駆けつけた頃には、“エトルランド”でのルシタニア帝国とアランドラ同盟国の戦いは、すでに前奏曲を終えていた……。

1 勇躍

帝都から北東に一五〇キロ離れた平野にそびえる『ヴェスヴィオ砦』は、二万の戦闘員と五万の非戦闘員を収容できるように設計されているため、砦というより一つの都市として考えた方が想像に易いだろう。現在、一万七〇〇名の戦闘員の六割はルシタニア帝国の正騎士で、残りの四割は先兵や対外警備兵として活躍する勅選の傭兵隊と、補給・城内警備担当の農民兵であった。非戦闘員のほとんどは、砦内外の農工業に携わり、騎士団に食糧と武具を供給して生計を立てている。

そんな砦の監視塔に立つ、黒髪の傭兵が大声を上げた。

「アンゲルス卿だ、お通ししろ！」

男の大きな返事が、そこからは見えないほど遠くから届くと、すぐに巨大な門は重苦しい音を立てながら動き出す。まず目に入ったのは、自分に向かって頭を下げている衛兵だった。これは義務ではなく、彼に対する敬意の表れだった。

彼らに頭を上げさせると、彼は愛馬を厩舎に預け、兵舎を目指して歩き出した。

兵舎への道を繋ぐ街中では、若く美しい騎士隊長に憧憬の眼差しを向ける者は無数にあり、女性の嘆息も聞こえてくる。緊急時であることは周知の事実のため、話しかける者はいなかったが。

市街地の四方を囲む巨大な城壁には、連弩や岩石発射管が設置された穴などの防衛兵器が用意されている。帝都のきらびやかな装飾とは無縁な城砦都市の軍管轄区に入ると、整列した数千人の騎士が彼に敬礼する。

「準備が早いな」

苦笑を隠しきれない騎士隊長の前へ、壮年の騎士が歩み出た。

「当然です、アンゲルス卿。すでにロメオン騎士団長と先鋒のジャスティン騎士隊長は戦場に発ち、後詰めたる我々もすぐに出立せねばなりません」

「ナダル、お疲れの騎士隊長に強行軍を強いるつもりか？」

それは疑問ではなく、確認であったのかもしれない。

「出陣命令には逆らえません」

皮肉っぽい言葉に相応しい表情さえ浮かべないナダルの兜から覗く顔は、実年齢よりも遙かに老けて見える。

ヘルムートは諦めたように溜め息を吐くと、

「腹ごしらえくらい……」

そう呟き、兵舎に向かった。

ゆっくりとした歩調で兵舎の門をくぐると、救護班以外は誰もいないことがわかった。床には、刃こぼれの生じた長剣や傷だらけの籠手が床に散らばっている。

武器そのものが国家の疲弊を表しているかのようだな、ヘルムートはそう思いながら、自分の武器に手をかけたが、急いだ様子を見せることはない。戦場に身を投じる者達の全てが、装備の不完全さは死を招くものと考えているのだ。

意図的に空を斬った愛用のクレイモアを鞘におさめ、腰に提げると、白銀の鎧でその身を包んだ美貌の騎士は、今度は早足で兵舎をあとにした。

ヘルムートの愛馬シュトルムは、休む暇もなく厩舎から叩き出されたことが不満だったのか、しきりに首を振って嘶いている。美し

い騎士が愛馬に近づくと、駆け寄ってきたナダルがヴァンプレート・ランスを彼に渡した。

「先鋒の騎士隊もあなたに気を遣って、編制基準よりも三〇名ほど多めの騎士を連れて行きました。だからといって、あなたをゆっくりは行かせませんが」

普段から遠まわしな表現の多いナダルは、遠慮なく自分の上官に告げた。

「……ということは、しばらくは奴らだけで対処できるってことか彼の誰に対しても遠慮のない性格は、この騎士隊長に影響されているのかもしれない、騎士達のほとんどがそう思っていた。」

「さて、行こうか」
とても重要な言葉を、とても重要とは思えない口調で言った上官に、部下の騎士達は不快感の欠片もない視線を向けた。

後世の歴史書には、この部下達の反応についても記述されている。戦闘を目前に控えていても緊張感に苛まれない、強靱な神経の持ち主である騎士隊長自身に忠誠を誓う者も、少なくはなかった。戦地で兵士と同じように自分の命を危険に晒し、沈着な計算のもとに決断できる指揮官が部下達に慕われなかった事実はない、と。

……騎士達の視線に応えるように、ヘルムートは手綱を引くと同時に、クレイモアを鞘から抜き、夕空に切っ先を向ける。夕陽を背景に映えるその姿を見た者は、戦慄が背筋を駆け抜けるのを実感した。

そして、美貌に似合わぬ低い声が騎士達に出陣の命令を下した……。

2 迫撃戦

秋の憂いに染まった空は、アランドラ同盟国軍とルシタニア帝国軍の壮絶な地上戦を見つめている。そこでは、弱体部に帝国軍が全兵力を叩きつけて戦線を突破したために、同盟国軍は大混乱に陥っているのだった。強行突破に成功した帝国軍は、戦場に急行しつつある騎士団第一陣との合流を目指し、組織的な反撃と後退を繰り返していた。

「槍兵隊、反転！」

第三軍司令官ベンジャミン・ペリーズ將軍の最後尾への指示による、組織的な反撃のはじまりだった。

「騎兵隊、離脱しろ。槍兵隊、攻撃！」

いい判断だ。一心不乱の人間には、必ず隙が生じる。上官の左隣を駆けている、第三軍の参謀ロイズ・フランシスは心の中で呟いた。司令官の抽象的な指令を、騎兵隊長は即座に理解した。彼の指揮の下、中列に控えていた一二〇〇の騎兵隊は本隊両翼に部隊を展開し、敵軍の右側面に斬り込んでいった。一〇分足らずで同盟国軍の長蛇陣は前後に分断され、圧倒的に少なくなった九二騎の騎兵からなる前衛部隊は、帝国軍槍隊の強攻で全滅した。

同盟国軍兵士の死屍で道が舗装されたため、追撃の速度も、決して満足できるものではない。ある者は死体につまづき、ある者はごく少数ではあったが 武器を握りしめたままの死体に突っ込み、死せる仲間の刃に身体を貫かれた。

「そろそろ諦めてくれんかな」

多くの敵を死に至らしめる作戦の実行命令を下した張本人は呟く。無駄な犠牲を避けることこそが彼の主義であり、用兵の基本であった。

「生還した騎兵には、例外なく恩賞を約束しよう。程度の差こそあれ、臆病風に吹かれた者にもな」

彼は言う。臆病風に吹かれた者がいても、責任の一端はそれを処断しなかった指揮官に帰する。失態の明らかな部下の処断も、指揮官の役目である、と。

同盟国軍の混乱は拡大し、帝国軍は今以上に後退の足をはやめた。

しかし翌々日の早朝、帝国軍の伝令が吉凶両報をもたらした。
「増援、両軍ともに到着！」

帝国騎士団の本拠地は、同盟国増援軍ほど戦場から離れていたわけではなかったが、農民兵や補給部隊も連れた騎士団にとって、これは急いだ結果であつただろう。

敵軍の増援には、味方に多少の恐慌が生じたが、第五軍司令官代理ナルセスの品性を欠く叱咤がそれを打破した。

「野郎、何を慌ててやがる！ 我々の任務は逃げることであつて、真正面から戦うことではない！ 敵増援は遙か後方、更に、兵が増えれば足並みが乱れるのは用兵の定石。よく考えてみる、我々は優位に立つたのだぞ！」

彼の言ったことが事実か否かは、四時間後に明らかになった。その時、同盟国軍は増援の再編に手間取り、帝国騎士団の急襲を受けたのだつた。

先陣をきつて敵陣に突撃したのは、獅子のような容貌に気障な笑みを浮かべた“百人斬りの勇者”ヴェイル・ジュリアスだった。二本の槍を両脇に挟み、それぞれ片手で握っている。

丸太のような両腕が一振りされると、鋭い音を立てた槍の矛先が、彼を挟み込んでいた同盟国軍兵士の鎧と兜の間隙を正確に捉えた。その数秒後には、宙を舞った左手の槍が獲物の頭を貫いていた。

兵士の命を三人を死神に売りつけ、鎧に犠牲者の数を刻むという、陳腐だが威圧的な行為は実を結んだ。鎧の横三列を埋めるおびただしい数の傷を見た三名の同盟国兵士は、彼に背を向けて逃げ出した。

しかし、敵前逃亡を潔しとしないジュリアスの偏見と勝者の権利により、彼らも背後から突き倒されてしまった。

時を同じくして、ヘルムート・アンゲルス子爵率いる第二陣は、指揮官の独断で迂回路を驀進していた。この行為が戦闘後に処罰の対象とされる可能性もあるが、彼としては戦闘の早期終結を優先したかったのだ。

「一気に戦力を投入したことにより、補給線の負担は明らかに重くなる。餓死するのはたまらん」

独断に対して慎重論を唱えた部下に彼は言った。

敵軍の左側面に到達すると、騎兵隊の急襲で警戒を強めた兵士達が、組織的な反撃に乗り出した。ヘルムート騎士隊の参戦によって完成した、ゆるやかな半包囲陣形は次第に収縮していく。

「これをどう思う？」

騎士隊中央部に退いたヘルムートは、隣で血を拭いている腹心に訊ねた。

「追撃戦に入って、敵は後方の警戒を怠っておりますな。補給線を叩く、良い機会かも知れません」

ナダルの言葉に左眉をつり上げ、ヘルムートは唇を歪ませた。

「じゃあ、略奪つてのは悪いことだと思うか？」

「それは……時と場合によりますな」

不意に無表情を崩したナダル。

「今は、絶好の機会でしょう」

その言葉に、ヘルムートの唇は更に歪んだ。

私より後方に控えた部隊は戦線を離脱せよ、という単純な指示で、騎士隊の後尾部隊と騎士隊長自身は戦線から離脱し、同盟国軍の後方で孤立している補給部隊に急襲をかけた。追撃に入った同盟国軍にとって、敵軍の後方奇襲は想定外のものだった。

「補給物資を欲しいままに奪え！」

荷物を抱えて逃げ惑う補給兵をランスで突き倒すと、ヘルムート自身は、ナダルに重要な指示を出した。

後続の補給部隊が全滅したとの報告が同盟国軍司令官タニア・ロム將軍のもとに届いたのは、襲撃開始から三時間後であった。

「貴殿は、この戦況をどう見る？」

失策に動じた様子もなく、ロム將軍は参謀ヨハネ・ハルデスに訊ねた。

「これ以上の犠牲を避けるためにも、撤退すべきかと」

あえて常識論を提示した老練な参謀。

「やはり、それしかないか。」

俺としたことが、こんなくだらない失策に身を委ねるとはな」

自嘲するように呟き、

「それにしても、奴らには達観した指揮官がいるようだな」

と続けた。

その達観した指揮官は、少数兵力をもって、いまだ同盟国軍の背後を脅かしている。

「まずいな、退路を断たれるぞ。全軍を急いで退却させろ」

猛々しい司令官の声に、参列者で反論した者がいた。部隊長バリである。

「しかし閣下、敵軍は度重なる追撃に疲弊し、こちらが全力で弱体部の一カ所に攻撃を加えれば敗走するでしょう。その後に返し刃で敵軍別働隊を葬るべきです」

「そんなことをしている間に、我が軍の疲労と飢餓は目も当てられぬ状況になる」

ハルデスの落ち着いた声が、彼の意見を否定した。不満そうな視線を投げかけながらも、自分の非を認めざるをえないようだった。

「閣下、我が隊だけで偵察を行わせて頂きたいのだが」
部隊長の勝手な発言に、赤みがかった髪を揺らして参謀が反発した。

「自重せよ。そんな行動を許可できるわけが」
「いや、やらせてやれ」

ロムの反応はハルデスと違うものだった。参謀は驚きに目を見張り、反論の手段さえ見出せないでいた。

そんなことはいざ知らず、彼は続ける。

「部隊長、貴殿に敵別働隊の動向偵察を命じる。機会さえあれば、撃滅するもよし」

バリーが感謝の意を込めた敬礼でそれに応えようと、司令官は頷きを返した。

その場を部下が去ると、ハルデスはやっと疑問を口に出した。

「何かお考えがござりますか？」

「あのような男は、私の幕下に必要ない。司令官の命令に不当な異を唱えるような猪突児はな。敵の手で始末してもらおうじゃないか」
冷酷な笑みを浮かべて、将軍は呟いた。

こうして、“戦術部隊指揮官としては有能だが、戦略知識に欠ける部隊長”は、ヘルムート騎士隊に名目上の偵察隊指揮官として差し向けられることになった……

3 陥穽

敵の退路周辺に陣を張ったヘルムート・アンゲルスは、敵少数部隊接近の報を受けると部隊を移動させた。

敵部隊から逃げるように戦場を騎兵隊は駆け回り、数分後に敵本隊の接近を知ると、今度は急速反転に及んだ。

緩やかな弧を描いたヘルムート隊は、その機動力に対応しきれなかった同盟国軍偵察隊の側面に矛先を向けた。騎士達の雄叫びと馬の足音が地を揺るがし、敵兵を戦慄の淵に叩き落とす。ヘルムートは槍を振りかざし、敵兵を馬から突き落とした。一回転した槍は鞍に掛けられ、長剣が見せ場を迎えた。キシヨウと名乗る豪傑を相手に数合打ち合うをするも、なかなか勝敗は決せず、お互いに兵士の群れに身を潜めた。

「この状況下で、何をしようというのです？ 戦火を交えても、ほとんどもは逃げているではありませんか」

ヘルムートと併走している、西国の戦闘部族出身の勇士ユーリが、浅黒い顔をしかめて言った。

「まあ見ておけ。あれを使うんだよ」

ヘルムートは足元の草地を指し示した。そして、彼は辺りを見回し、数秒後に大声を上げた。

「全隊に合図を！」

ヘルムートが指示を出すと、騎兵隊が横列に展開し、薄く広い陣形で反撃を開始した。

騎士隊長自身が放った火矢を合図に、近距離に控えていた弓騎兵隊も火矢を二本ずつ弓の弦にかけ、それを放った。やがて、穂先から根本にかけて炎に包まれた矢が、広大な草原に等間隔で墜落した瞬間、地獄の業火は同盟国軍本隊を包囲した。

偵察隊を敗走に追い込んだヘルムートが、剣を鞘におさめて声を張り上げた。

「貴殿らの勇戦に敬意を表す。この上に残された道は、虜囚たることを受け入れ生を全うすか、燃え盛る業火に吞まれるか、それだけだ。もし、前者を受け入れるつもりであれば、火炎の壁に活路を開き包囲網を敷いてある。諸君が武器を捨てて投降を選ぶのなら、我が軍は人道に基づいて諸君を迎えるであろう」

ヘルムートは、戦争自体が人道に反する行為であることに皮肉を覚えながら、敵軍に呼びかけていた。

やがて、名目上の降伏勧告、事実上の脅迫は功を喫した。

その時、同盟国軍将兵にとって、心地良いはずの風は死神の息吹でしかなかった。自らを撫でつける風の体感温度は、上がるばかりである。

熱風に煽られながらも、兵士達は言葉と視線を交わし合った。

「おい、どうする？」

「部隊長の首でも手土産に降伏しようか」

「火炎を越えて、荣誉ある戦死を遂げよう。誰か、私に水をくれ！」

「いつそ、敵の戦力に組み入れてもらってもいいだろう」

そんな中に、一人だけ冷静な判断を下す部将がいた。

「俺は閣下の指示を待つ。部下を大事にしてくれる將軍だからこそ、今まで命を投げ出してきた。このまま無為に死を待つのも悪くないが、あの方はそんな意味のない死を選ばないだろう」

その言葉を裏付けるように、部将のもとへ伝令が駆けつけてきた。「司令官閣下から伝令！」

“我が軍は、今日をもってアランドラ同盟国軍から白旗集団と成り下がる。武器を捨て、速やかに降伏せよ。自害または挺身突撃、その他殺傷行為は命令として一切禁ずる。しばし神に授かりし身を休め、来るべき解放と再戦の時に備えるべし”

以上

部将は短めの赤髪を撫でながらため息をつき、部下に命じた。

「聞いての通りだ。我が軍は武器を放棄、全面的に降伏を受け入れる。お前らの命は、この私、ウェイン・ロムに与えられた全権の許

す限り保護に努めよう」

彼の言葉を聞き終えると、狂喜した兵士達は武装を解除し、不安げに炎の壁を抜けていった。それを見送った赤髪の部将は、まるでピクニックにでも行くような調子で呟いた。

「さて、司令官のところにも行つてくるか。

……勇敢な『銀翼の戦神』^{マルス}の言葉に甘えるために」

本陣では、参謀ハルデスや多くの情報統制官が慌ただしく命令文書や作戦文書の焼却に励んでいるようだった。その中をのんびりと歩く赤髪の部将に気づいている者はほとんどいない。

「タニア・ロム將軍」

聞き慣れた声に、將軍は振り返ることなく呟いた。

「……見事にやられたよ、ウェイン。私の戦争は、ここで終わりのようだ」

ややあつて、ロムの弟は口を開いた。

「そんなことはありません。今は虜囚となる他ないでしょうが、必ず味方が助けに来るでしょう」

「しかし、それは何ヶ月も先の話だな。我が軍はこの戦いに一万三〇〇〇余、敵軍も同等かそれ以上の兵力を投じたんだ、しばらくは侵攻らしい侵攻はしないだろう」

帝国軍の全兵力は二二〇万、同盟国軍は一九〇万。双方にまとまった兵力があるとしても、それを動かすに不可欠な兵站は、今回の負担が重なって悲鳴を上げる。

「だからこそ、気長に休暇でも楽しむ気分で待ちましよう、兄者」
拷問やら死刑やらが待ち受けているかもしれないが、とウェインは心の中で呟いた。

こうして、エトルランドの戦いは幕を閉じた。この戦闘での活躍が著しいヘルムートとジュリアスには、それぞれ兵権の拡大と特別給与が約束され、国内外にその名を知らしめた。

部将ウエイン・ロムの「銀翼のマルス」という言葉は、いつしかヘルムート・アングルスの名となっていたのだった。

ルシタニア帝国軍参戦兵力：一万五八〇〇。戦死・行方不明者六〇〇〇余。負傷者三五七一。第五軍司令官ラウル將軍、戦死。

アランドラ同盟国軍参戦兵力：一万三五〇〇。戦死・行方不明者九〇〇〇余、負傷者二〇六九。全軍降伏、壊滅。

4 冬の来訪者

エトルランド草原での大規模な戦闘が終結してから三ヶ月が経過した。ルシタニア帝国領では、降り注ぐ雪が冬の到来を告げる頃である。動物は寝静まり、大都市の喧騒は鳴りをひそめ、人々や動物の声が鼓膜を刺激することはほとんどなくなっていた。

ペルガモン城内では、参謀会議を終えて、二日の休暇を得たヘルムート・アンゲルスが部屋を出てゆつくりと歩いていた。彼は鎖帷子^{チェーンメイル}以外には何も防具を身につけていない。彼の肉体は数週間^{チェーンメイル}に及ぶ戦いの日々に疲労してはいたが、チェーンメイルを通して視覚できるほどに筋骨の逞しさを誇っていた。

青白い輝きを放つ雪を乗せた木造建築が主体の壮観。その中に美しい貴公子があるために、それは美観に変化するのであった。

「人は少ないか」

しかし、冬景色に染まった帝都を散策するために外へでている者は皆無に等しかった。逆に巨大な暖炉の温もりに身を委ねた城内が賑やかさを増したため、ヘルムートの神経は参ってしまったのだが。

そこに、馬に乗って歩いてくる小柄な人影があった。長めの白いローブに身を包み、それよりも白々とした手でしっかりと手綱を握っていた。

「あの……」

近づいてきたその人物は、遠慮がちに尋ねてきた。

「ペルガモン城は、正面に見えるあのお城でしょうか？」

「そうです。この地、帝都アッバースに、城は一つしかないのです。異国の方だろうか、ヘルムートは思った。一つの街に複数の城があるという話は、大陸の中央に位置する中立国家ティスメルド・マ^{ウチェルト・ブレダートレ・ブルク}イチ連合の『猛禽の三連城』以外に聞いたことがなかったのだ。

「そうですか、よかったです……」

よくよく聞いてみると、その声は

「ああ……えっと、お嬢さん？」

どう首をひねるうとも、出てきた結論は『女の声』だった。彼は気まずそうに、その少女に話しかける。

「はい」

透き通るような声が、彼の鼓膜を撫で回した。

「お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

彼がそういうと、少女は顔を赤らめた。

「あっ……自己紹介がまだでしたわね。」

わたしはデイスメルド・マーチ連合のシャロン・アポロニア・ハートベイカーと申します」

フードを外したシャロン・アポロニア・ハートベイカーの髪は、陽光を反射してやわらかに輝くクリーム色であった。

少女の言葉を聞いて、若き騎士の目は見開かれ、畏怖するような色はその美貌に浮かんだ。

「これは失礼を、お嬢さん。ところで貴女、ハートベイカー將軍の父をご存知ですか？」

彼の言葉を遮ったシャロンは、不思議そうに首を傾げた。

「同じ道を歩む者の中に、貴女の父上を知らぬ者はありません」彼は笑顔の裏で、記憶の人名図書館から『謀将ハートベイカー』という書物を手繰り寄せていた。

二六年前、デイスメルド・マーチ連合最大の内戦『東北戦役』では、ハートベイカー率いる反乱勢力が手勢二〇〇〇の軍で敵兵糧庫を襲撃、六〇〇〇の本陣防衛隊を兵糧攻めによる混乱で無力化し、敵将と内応して右翼部隊五〇〇〇を併合、左翼部隊の指揮官を暗殺した後、正面から戦いを挑んだ二五〇〇の陽動隊で敵陣中央を強行突破、本陣を混戦に巻き込み総大将ハメルを捕縛、倍以上の敵軍を敗走させた……。

謀将の名をほしいままにするような男の娘が、なぜこんなところに……？

その疑問は胸中にねじ込み、口からは違う言葉が出た。

「どういった用件ですか？」

「それ」から手を離して頂けるのでしたら、お答えしますわ」

少女は、若い騎士の腰に提げられているものを指差して言った。

「それとも、身元のわからぬ少女の全てにその礼儀でお応えするの
が、この国のルールですか、騎士殿？」

「……これは失礼を致しました、お嬢さん」

目を瞬いた“騎士殿”は剣の柄から手を離し、そして付け足した。

「しかし、あまり得策とはいえませんよ」

「軽々しく父の名を口にすべきではありませんものね」

少女の翡翠色の瞳に、一抹の影が降りたように見えた。気まずい
雰囲気振り払うように、彼は話題を戻す。

「ええ。それで、用件というのは？」

「……両国の友好と通商安定に関わる重要書類を携えております」
本当なら、この若く美しい騎士に教える必要はなかった。だが、
少女としては抽象的であっても内容を教えておけば、彼が門扉を開
くよう口添えしてくれて、本来よりも早く城門をくぐれるという計
算があった。

その後、彼が取った行動を見る限り、功を喫したようだった。

この人の好い騎士について行き、難なく王城敷地内に入った瞬間、
彼女は絶句した。

あらゆる美辞麗句を並べるに値する外観。かといって、城塞とし
ての機能が損なわれていないわけではない。

淡い陽光を受けて鈍い輝きを放つ鉛製投げ槍・投擲用岩石・弩が
城壁に備えられ、壁自体には横に細長い穴があり、それが攻城兵器
破砕機の発射孔となっているようだった。

人体に悪影響を与え、鉄製・木製に比べ重量に優れることが鉛製
投げ槍採用のきっかけである、と少女は父から聞いたことがあった。
「素晴らしいでしょう」

シャロンの“可憐な美しさ”のある顔を視界の端に捉えながら、

ヘルムートはいった。彼の視線も巨大な城に注がれている。

「ええ。籠城戦闘に特化していながら、優美さも損なわれてはいない……」

ヘルムートは目を見開いた。

「ほう……」

「この城の美点をも見抜くとは、さすが」
先程の自分の言葉を思い出し、彼は少女の面白がるような微笑に怯んだ。

しばらく歩みを進めていると、大きな門が見えてきた。門前には二人、武装した兵士の姿があった。

「すまないが、このお嬢さんを通してやってもらえないか」

ヘルムートが問いかけると、年配の兵士から、彼自身がいったのと同じ言葉が返ってきた。

「どのようなご用件で？」

彼は衛兵に近づき、用件を耳打ちした。

「彼女は、デイスメルド・マーチ連合の特使だ」

「こんな少女が……本当にありますか、閣下？」

年配の兵士は、驚きを隠しきれないといった表情で小柄な少女に目を向けた。

「信じがたい話だがな。しかし、陛下に取り次ぐ前に文書も徹底的に検証される。この少女にもその察しはつくだろう。」

あえて来たからには、恐れは不必要であり、偽りはなきに等しいと思わないか？」

若い騎士の言葉に、その先入観を逆手に取った策謀ではないのかと兵士は思ったが、これ以上反論しても機嫌を損ねるだけだと感じ、城門を開けるよう指示した。

「お待たせしました、お嬢さん」

ヘルムートがそういうと、デイスメルド・マーチの若い特使は春の日差しのような笑顔を向けた。

「ありがとうございます。」

あと二人でいる時、わたしのことは名前でお呼びになって」

「わかりました、シャロン……様？」

少女の翡翠色の瞳を覗きこむ。

「二人きりの時は、呼び捨てで構いませんわ」

可憐な微笑がそれを迎えた。嘘偽りのない笑顔は人を幸せにするというが……このことだろうか、と若き騎士は考えた。

シャロンと共に、ヘルムートも客間に案内された。そして、彼らをこの部屋に案内した使用人はゆっくりと頭を下げた。

「ご苦労様です」

友好中立国であつても、決して味方の地ではない場所に深く入り込んでいるのに、使用人に対するその言葉からシャロンの緊張感は全く伝わってこない。この少女は無神経なのかとも思ったが、“鈍くさい”というわけではなさそうだった。

シャロンがためらいがちに口を開いた。

「あの、城外に護衛の兵を三〇名ほど待たせているので、彼らに休憩所か何かを設けていただければありがたいのですけれど……」

「それは一大事ですな。すぐに用意させます」

ヘルムートは急ぎ足で扉を開き、客室を守る三人の衛兵に話を通した。

一人の衛兵は大急ぎで廊下を走り、近場の宿屋との交渉に向かった。問者に間違えられてはたまらない、と呟いて。

「ありがとうございます」

少女はゆっくりと頭を下げ、上げるとヘルムートを直視した。

「……楽しいお散歩を中断させてしまったようですわね」

困ったような表情をしながら彼女は続けた。

ヘルムートは笑顔で応じる。

「この分の時間外手当と振り替え休日が支給されますので、ご安心

を

「まあ」

二人の若者の笑い声が室内に響く。

「……それにしても、その若さで『閣下』と呼ばれるなんて、よほど優秀な騎士様ですね」

シャロンが感心したように言った。

「いやいや、ほとんどが祖父の七光りです」

「ふふ、そんな謙遜する必要はありませんわ。あなたは有名人ですもの。」

エトルランドの英雄さん

彼は少女の微笑に一瞬だけ見惚れたが、読みとられぬうちに表情を切り替え、苦笑しながら口を開いた。

「そのように言われているのですか」

「ええ、若く美しい騎士隊長が戦局を急進展させた」と

彼が応えようとした時、扉をノックする音が聞こえた。

「どうぞ」

シャロンは明るい声で言った。

「失礼します。ハートベイカー様、皇帝陛下が面会を許可なされ、準備が整いました。こちらへ……」

部屋に入って恭しく礼をした使用人は、シャロンの手を取って近づいてきたヘルムートに紙を渡し、彼女を外に招いた。

一礼をして使用人が去ると、ヘルムートはその紙に目を通す。

《イスアル騎士団騎士隊長ヘルムート・アンゲルス子爵に勅命である。》

面会が終わるまでに武装した騎兵一〇〇を召集し、それをもってハートベイカー令嬢の護衛を貴殿の最優先任務とし、直属の護衛兵と協力して令嬢をデイスメルド・マーチ領内まで無事に送り届けよ。苦笑した彼は『勅書』に向かって呟く。

「私の休暇は……？」

彼の意志をもひねり潰せるだけの権力を持ったそれは、無論、何

ヘルムート戦記

も答えなかった。

5 出立

ナダルに勅命の概要を伝えると、ヘルムートはペルガモン城内の自室に戻って、重武装に身を固めながら独語した。

「彼女を送るとなれば、故郷あそこを通るな」

帝都からデイスメルド・マーチ連合領を目指すには、『ロゼッタ』という地方を通過するのが常道だった。それは彼の祖父イアドランが統治を委任された地でもある。聡明で美しい姉リディアが警備軍副司令官と憲兵隊司令官を兼ね、柔和で沈着な兄ロビンが領主補佐を任されている。

「リディアとロビンが逆の性で生まれれば……」

というのが祖父の評価である。リディアには貴族社交界の体面もあつたし、ロビンには逞しく育ってほしかったのだろう。孫二人の反撃については明らかにっていないが、リディアからは怒号、ロビンからは無言の苦情が届いたとヘルムートは見ている。

……ヘルムートが意識を水面下から引き戻すと、自分と呼ぶ小さな声が聞こえてきた。

「……アンゲルス卿」

ヘルムートの自室を守る警備兵だった。

「どうした？」

「閣下の弟を名乗る青年が二人、お見えになっていますが」

「ふむ……」

彼は双子の弟のことを即座に思い出し、警備兵に指示を与えた。

「武装を解いた状態で通してくれ」

ヘルムートの弟を名乗る二人は、彼の前に非武装で姿を現した。
「お久しぶりです、兄上。リヒャルトと弟のオスカーでございます。」

此度、我ら兄弟は兄上の護衛を最優先任務するよう、お祖父様から仰せ仕りました」

双子の兄がギクシャクした口調で言うと、ヘルムートは冷たく言い返した。

「お前達兄弟の顔なら、一目でわかる。

……で、何のための護衛だ？」

声の高低差以外は聞き分けのつかない兄弟は、兄の心に立ち込める憤激の暗雲に気がついた。

「……ええと、兄上の身を案じて」

銀髪の兄がクレイモアに手を伸ばす光景が、オスカーの言葉を途切れさせた。

「あのご老体が私の身を案じるとしたら、もっと早く手を回していただはずだ。

……ナダルか誰かの差し金だろう。違うか？」

「ご明察の通りです」

そう答えながら、冷たい汗が背筋を伝っていることを、リヒャルトは自覚した。末弟のオスカーは“面倒な問答”の全てを兄に任せられているようだった。

「では、残りの話は“お節介な副官”に訊くとしてよう。

……お前達も準備を整えておけ。すぐに出立する」

威圧感を含んだ上官の言葉に、双子の護衛兵は従うしかなかった。

「やっぱり、兄さんは貴族の面目を保とうとしている気がするよ」
オスカーは静かに言った。

「ああ、俺らが貴族の子弟なのに騎士叙勲をしないで、傭兵隊に志願したからだろう」

欠伸をしながら、リヒャルトは同意した。

「やっぱり、傭兵は評判が悪いんだなあ」

「当たり前だろ。“あの事件”の傷痕は、そう簡単に癒えるもんじやないさ」

答えながら、双子の兄は思いを巡らせた。

あの事件……“大乱の闇夜”と呼ばれた、傭兵隊による大量虐殺と大強姦事件。先帝ヴァンダレイ三世の三女（皇帝ルーファウスの妹）も犠牲になったと言われている。

オスカーはゆっくりと歩き出した。戦争と殺人と強姦は、人間の歴史の中で絶えることのない三大悲劇だ、と呟いて。

少しずつ太陽が顔を見せ始めた頃、その控えめな陽光に照らされた少女の姿は、一輪の冬薔薇を思わせた。

彼女の側にゆっくりと近寄る者があった。紫色の奇妙な甲冑を身につけ、歪曲した剣を腰に提げている。

「信頼できるお方ですわ」

無言で直立する護衛隊長に、少女は半ば独語するように言った。

「かといって、全面的な信頼は置くわけにはいきません、シャロン様。今でこそ盟友と呼べますが、この国はかつての敵国ですから……」

返答した男の表情は、口だけが動いているように感じられるほど硬かった。

「少なくとも、騎士殿は信頼に値するお人柄でしたわ。そうでしょう、ジェクス少佐？」

「あの方は確かにそうでしょう。ですがやはり、油断はなりませんぞ」

矛盾したことを深刻な顔で言うと、

「心得ております」

シャロンは、厚手のローブの下に納められた四本の短刀を腹心の男に見せた。その顔は不敵な笑みに満たされている。

「心配ありませんとモ」

繰り返す言うと、不敵な笑みを奇怪な微笑みに変えた。そして、少女はゆっくりと背を向けて歩き出す。

彼女が父親から受け継いだものは、未恐ろしい資質だったのかもしれない、とジエクスは後に語った。

重武装した騎士団の一隊が、正規軍帝都警護部隊から“異国の姫君”以下三〇名の護衛兵を引き受けたのは、それから間もなくのことであった。

「身命に代えましても、貴女をお守り致します」

銀髪の若者は、護衛対象たる少女に安心させるつもりで声をかけ、護衛隊長ジエクス少佐と無言で握手を交わした。

円陣で護衛対象を囲みつつ、ゆっくりとした足取りで進む騎士隊に、ある凶報がもたらされた。

「“ウイヴァーゼン”一個小隊が接近しつつあり」

騎士達の表情は驚愕と恐怖に歪んだ。

「ウイヴァーゼン……？」

シャロン姫は、おっとりとした口調で語尾に疑問符をつけた。

「非合法的に組織された私兵集団の総称です。大貴族による個人創設が主な発信源で、法的保護は得られず、任務と共に略奪・暴行を

「

「つまり、捕虜になって殺されても文句は言えず、武装だけはいっちょ前の略奪集団ってことです」

ヘルムートの護衛として控えていたオスカー・アングルス言葉を、ヘルムートが簡略化して遮った。

「まあ……大丈夫ですよ？」

口ほどには驚いた様子もない少女は、遠くの略奪集団を眺めた。「略奪される前に与えてしまえば良いのです」

「……というと？」

「実演を御覧あれ」

ヘルムートは小さく笑い、四騎の配下を引き連れて馬を走らせた。「ウイヴァーゼンの大将に告ぐ、私はルシタニア帝国軍イズアル騎士団のヘルムート・アンゲルス子爵だ」

自分の名を振りかざすことに抵抗がなかったとは言えなかったが、彼は任務優先の軍律を守ることにしたのだ。

「人質にしようとするのではないか」

身辺でシャロンを守るナダルは呟いたが、彼女はそれに同調しなかった。彼の鬼神の如き活躍は、国内であれば、情報網に疎い貧困層ですら知るところであったから、ウイヴァーゼンのような無法者も迂闊に手出しはできないと思われるのだった。

「貴殿らの大将と話がしたい。大将は私と同数の配下を従え、こちらに来て頂きたい」

しばしの沈黙の後、数十人の無法者の中で比較的背の低い栗毛の男が前に進み出た。毛皮のコートを羽織っていて確認はできないが、武器は所持していないようだった。

「俺達に喧嘩をふっかけてきた、今までの坊ちゃん方とは格が違う奴のようだな」

尊大に男は言うつと、一人で騎士達に近づいてきた。ヘルムートは、目配せして配下の騎士を下がらせた。

「貴殿らと争う気はない。事を穏便に進めたいのでな」

ヘルムートが馬を降り、男を見下す形で対峙した瞬間、二人を隔てる空間の一部が輝いた。

「よく止めたものだ」

「……“暗器”か」

ヘルムートが目を移すと、逆手に握られた長剣とコートの袖から取り出された小刀が競り合い、小刻みに震えていた。

状況の急展を交渉の決裂と見なしたナダルらであったが、剣戟を交わした両者が武器を収めたことを遠目で確認すると、安堵の溜め息を吐いて今度こそ静観を決め込んだ。

やがて、交渉は首尾良く進んだようで、騎士達の若き上官は“五体満足”で戻って来た。

「戦場では命令伝達の苦勞、平時では軍令の苦勞、任務では上官の苦勞があるものだ」

とは、この時のナダルの心情であったが、口から流れ出した言葉は少し違っていた。

「子爵、今少し自重をお願い申し上げます」

「……ああいう奴らは、頭目同士が話し合ったり討ち合ったりすることを己の美学にしているのだな」

笑顔で答えたヘルムートから謝罪や反省の言葉はない。

「ですが」

「もう良いでしょう?」

ナダルを一瞥し、シャロンはゆっくりと遮った。

「子爵様が無事なら、何も問題はありませぬわ」

ナダルは無言で頷き、少女の正しさを認めた。

「それにしても、お金の力というのは……」

騎士隊が広大な荒野を歩き始めると、シャロンは呟いた。

「恐ろしいものですか?」

「いいえ、美女の色香よりも魅力的な武器ですわ」

ヘルムートの質問というより好奇心に笑顔で答えたが、相手の表情の激変に顔を赤らめ、俯いてしまった。

上目遣いでゆっくり見返すと、女性に似合わぬ冗談は言わない方が無難ですぞ、と言いたげな表情は消え失せていた。

「私は“色香派”ですよ」
という、片足が一線を超えた耳打ちと引きつった笑顔がシャロンを迎えたのだった。彼女の幼げな顔の向きが、また地面に固定されたことは言うまでもない。

美しい特使に対する言葉が“冗談”であったのか、“本心”であったのかが判明するのは、もっと先のことであった。

…

果てしない空の下、若い騎士の物語は始まったばかりであった…

6 リディア

ウイヴァーゼンとの遭遇以後、ヘルムート一行は何事もなく前進し、帝都出立から一週間が経過していた。ロゼッタ最大の軍事拠点『バルム城塞』の門をくぐると、戦場さながらの重装備に身を固めた傭兵達が目についた。城内では、貿易商やら武器商やらが忙しく走り回り、軍需物資を補充している。

しばらく城内の待合室で待たされた後、部屋に入ってきたのは、この城の警備責任者だった。彼はヴェイエリと名乗り、ヘルムート達に客室を貸し与えてくれた。

「客室……ねえ」

釈然としない表情でリヒャルトが呟いた。

「あまり清潔な部屋は期待できないね」

「全くだ」

オスカーの言葉に頷くと、彼は近くでヘルムートと談笑しているシャロンに目を向けた。

「可憐で綺麗な“お姫さん”だこと。それに」

含みのある口調で呟くと、ローブを脱いで薄着になった少女の胸元に視線が落ちた。

「こっちも、余裕で合格」

兄の独語がオスカーには届いていたため、その鍛え抜かれた拳が、瞬時に兄の顔面を捉えたことは言うまでもない。

「これだけの騎士を連れて行くのは難儀ではありませんか？」

双子が不毛な争いを始めた頃、ヘルムートとシャロンは、談笑から真面目な話題に移っていた。

「ロゼッタ領内を出てからは帝国軍国境防衛団の護衛を手配してあります。なので、彼らのほとんどはこの地で任務完了となり、最前線にある我が隊の本拠地まで直接向かうことになります」

「では、食糧の心配はありませんのね」

「無論です」

このような問答をしながら、ヘルムートは驚きを禁じ得ない。この“異国の姫君”は、軍事学に関する事柄をあれこれと彼に訊ねてくるのだ。それも、根幹たる戦略理論を踏まえた上で、確認するかのように。

無論、高名な將軍である父親の影響はあるだろうが、“深窓の姫君”を具現化したように美しく可憐な愛娘に、血生臭い行為の細部まで教えようとするとは思えなかったのだ。これは論理面よりも感情面の反発に属する考えであつたが、こういつた先入観があると容易には見つからない答えが自ら彼の前に現れた。

「このような理論って、面白いですわ」

同時に、ヘルムートの両目が見開かれた。しかし、その反応はシヤロンの発言に対する確信ではなく、扉を開けた長身の人物の姿をシヤロンの肩越しに認めたからであつた。

「姉さん？」

ヘルムートが静かに口走つた言葉に、シヤロンはゆっくりと振り向いた。

青年騎士の姉は、弟に向けて、

「やあ、ヘリー」

と声をかけたきり、クリーム色の髪の少女に視線を転じていた。

「あなたがシヤロンね。私はこの城の城主リディアよ。よろしく」

弟とは対照的なリディアの言動に、少女は内心たじろいだだが、優美な動作で、差し出された手を握つた。

「シヤロン・アポロニア・ハートベイカーです。こちらこそ、よろしくお願ひしますわ」

型通りの社交辞令が済むと、すぐにヘルムートは姉の私室に招かれ、今後の日程が話し合われた。

「あなたの部下九五名は、一一名を残して本拠地に戻ることになる。それはわかっているね？」

リディアは、目の前の弟と同じダークグリーン色の瞳を煌めかせた。

「ええ」

「あなたに命令を発した上官が、補給を軽視する人物なのか、大軍なら安全だと思い込んでいる精神構造なのかは知らないけど、これだけの護衛を連れて、よく餓死しなかつたわね」

「無能で鳴らす軍務次官が編制しましたから、数も物資も破天荒なのです」

弟は苦笑して応じた。

「困った次官殿ね。」

とにかく、国境の防衛隊と合流するまで少数の兵で頑張ってもらうよ。それと、通行許可証を明日までに用意するから、アルピアス街道を通るといい。あそこはリグリアの傭兵隊が確実な“害虫駆除”を行っているし、ほかの道を使うよりも早く国境に到着できるから」

東方の自治区リグリア辺境領出身の傭兵は、過不足なく仕事をこなすことで有名であった。そのため、ルシタニア帝国では、勅選傭兵隊の三分の一がリグリア人部隊で構成されている。

「では、その道を使わせて頂きましょう。私は四〇名の護衛と一人の特使を連れて、明日にでも発ちます」

弟の答えに頷き、リディアは自ら戸を開けて、

「また会おう、ヘリー」

やはり男っぽい口調で言った。

その日の夜、ヘルムートは用意された質素な服に着替えて、割り当てられた部屋で赤ワインを手に取った。

寝椅子に身を委ね、ゆっくりと今後の行程を見直す。

「アルピアス街道まで半日、街道を抜けるまでに三日……」

一息おいて、

「予定の二週間より早く着きそうだな」

と彼は呟いた。

旅の疲れを癒すため、あちこち見て回るのも良いかもしれない。いずれ、再び戦いに身を投じる時がやってくるのだから、これくらいの息抜きは許されても良いはずだった。

彼が思考の駒をのんびり進めていると、誰かが部屋の扉を遠慮がちに叩く音が聞こえた。

「どうした？」

「ジエクス殿がお見えです」

「構わない、通してくれ」

筋骨隆々の異邦人は、足音も立てずに部屋に入ってきた。丁寧に一礼すると、左手に握った酒瓶をぎこちなく差し出した。

「我が国の流儀です。本国産の安ワインですが……一杯、いかがですか？」

「……良いだろう」

ヘルムートは唇の両端を僅かに吊り上げた。彼は、この客人に対して言葉遣いを変えるつもりはないようだった。

無言で酒を酌み交わすことが三往復に達した頃、若い騎士の方から沈黙を破った。

「そういえば、以前からハートベイカー將軍はどういったお方なのかお聞きしたかったのだが……」

英雄に対するヘルムートの興味がそう言わせたようだった。

「一言で言えば、とても質素なお方です。愛娘たるお嬢様にもそれだけは徹底させておりました。そのため、貴族に異端児の如く扱われ、政治家からも冷淡な目で見られているようでした」

「英雄というのはそんなものだ。能力的に優れた者であるが故に、理解者に恵まれることは少ない。人によっては、英雄を英雄と認めることもできず、見下すこともあるのだろう。逆を言えば、一部の英雄は、理解者に恵まれたからこそ認められたとも言えるが、実際はほとんどいない。あのゼフィオン大帝ですらそうだった」

ヘルムートはつくづく思うのだった。過去の歴史において、強大な才能に対する嫉妬と羨望の夫婦は、必ず危機感という名の子供を

生んできた。そして、英雄という名の宝石は、近くで見ると眩し過ぎ、素手で掴むには熱過ぎた。嫉妬と羨望の子供は、時に失明で理性を失い、時に火傷に憤怒して、あらゆる宝石を溝の中に捨て去る。その多くが自分の責任であり、自分の生存に必要な存在であることも忘れて……。

「古来、戦場に倒れる名将はほとんどおりませぬ。私には、名将の名將たる所以はそこにあると思われませんがな。」

指揮官には、戦に勝つことだけでなく、戦場に倒れることなく部下に対する責任を全うすることにもあるのですから」

ジェクスは、そう言いながらグラスにワインを注いだ。

「戦に勝ち、部下を生き残らせ、自らも生き残って、任務を終えるまで部下を統率する。ハートベイクー將軍はそれをできる方なんだろうな」

「左様です」

壮年の少佐が頷くと、銀髪の騎士は小さな笑みを浮かべて言った。「謀将という言葉だけで括れる方ではないな。一度、將軍のもとで戦ってみたいものだ」

再び時が静かに踊り始めると、二人の勇者は微笑を交わして、同時にグラスを空けた。

毛布を華奢な身体に巻きつけて、シャロンはバルコニーに佇んでいた。空から降り注ぐ蒼い光が彼女の透き通るような肌を艶かしく彩り、より一層その存在を儂げに見せている。

「あの方に会ってもらいたいものですね、お父様」

正面に広がる街並みを見つめ、この遙か先で大軍を率いているはずの父親に囁いた。

それっきり、彼女が言葉を発しなかった。ゆっくりと背伸びをして、夜空に輝く星々に両手を伸ばし、優しく包み込んだ。

翌朝、四一名の勇士は準備が整い次第、ヘルムートを先頭に出発することになった。見送りに来たのは、リディアと三名の護衛兵だった。

「あれ、警備責任者のおっさんは？」

リヒャルトが弟に訊ねた。彼は“おっさん”の名前はすでに忘れていた。

「さあな。用事でもあるんだろう」

オスカーは肩をすくめて辺りを見回した。

「兄さんは？」

リヒャルトは、門の前に立っている兄に人差し指を向ける。

「あそこで“楽しいお話”さ」

彼らの兄は、“楽しい”というには深刻過ぎる顔でジエクスと話していた。

「行程は昨日の夜に説明した通りだ。護衛部隊の配置は先日と同じで、前衛に私の部隊、後衛に貴殿の部隊、決して前後離れることのないようお願いしたい」

「お嬢様の場所は……」

「後衛の中央だ」

「承知しました。私は部隊に戻らせて頂きます」

ジエクスが歩み去ると、今度はリディアがヘルムートに話しかけた。

「大変ですか。美しく愛らしい姫君を守る時だけは、副官に一切を任せずに自分でやるのは」

「ナダルには部隊から抜けた騎士達をまとめてヴェスヴィオ砦に送り返すという任務がありますから」

ヘルムートは、表情一つ変えずに応じた。

「……それだけか？」

「否定していませんが」

リディアは鼻を鳴らし、きつく弟を抱きしめた。背は彼女の方が

低いため、遠目からでは恋人同士の抱擁に見えなくもない。

「気をつけな」

「言われるまでもありません。というか、やめてくださいよ」

「相変わらず、可愛げのない弟だな、お前は」

彼女は弟を解放してやった。

「……誰に似たんでしょうね」

顔を背けて、可愛げのない弟は呟き、続けた。

「じゃあ、またしばらくお別れです」

彼は馬に飛び乗り、自分と同じくリディアに呼び止められた双子の弟が何事かを囁かれて抱きしめられているのを見つめていた。

「出発だ。目指すはルシタニア・ディスマルド・マーチ国境地帯。

そこには警備隊の連中が待っているそうだ。お姫様を送り届けたお礼として、ここらでは見られないものを食わせてもらえるかもしれないぞ！」

双子が帰ってきたのを確認したヘルムートが声を上げると、騎士達は雄叫びで応じ、ゆっくりと歩き出した騎士隊長について行く。

三人の弟達は、それぞれのタイミングで遠ざかる姉に一度だけ振り向いた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5892c/>

ヘルムート戦記

2008年8月28日23時45分発行